

आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

*** ラブレターと図書館 ***

京都文教大学図書館長

総合社会学部・教授(国際協力・CSR) 島本晴一郎

最近、欧米では、図書館にまつわる利用者の思いを熱く綴ってホームページ上で公開する、いわば図書館への「ラブレター」掲示板が進行中という。ホームページに掲載された「ラブレター」には感動的なものもある。不登校のため学校に行けず、図書館を駆け込み寺として用いたこと、人種差別や経済的逆境で教育機会を剥奪されたが、図書館で自習をして社会的自立ができたことなど。本気で学びたいと思うすべての人に対し、その学ぶ機会を剥奪してはならないという高邁な理念が社会に根づいていればこそ、図書館をもっと見直そうというのだろう。

そこで、たとえば本学の図書館に対してラブレターを書くとしたらどう書けるだろうと考えてみた。まず大学と短大を合わせると34万冊を超える、広範な専門分野を中心とする豊富な書籍の所蔵は掛け値なく素晴らしい。そのおかげで思わぬ本との出会いがあった、自分の小さな視野が広がったと言う学生諸君やその他利用者の声を多く聞く。特に臨床心理学や文化人類学の専門書については、他大学などより頻繁に問い合わせがあるという。それだけ専門性の深い書籍を設けているのだ。しかもその特色は専門書の数だけに留まらない。様々な学生の興味に応えることに最大の力を注いでいるため、その領域は一般教養、そして生活のノウハウから趣味の分野まで驚くほど広い。これは我が図書館が伝統的に、徹底して主たる利用者である学生の目線を大事にしてきたからだ。毎年春秋に行われている学生主体のブッ

クショップ・ツアー(「学生選書」)は、紛れもなくその一端と言える。学生目線を知らせる意味でも、学生諸君もどんどん図書館へのラブレターを寄せてほしいものだ。

我が図書館の「お宝」に対するラブレターも書かねばなるまい。短大も含めて本学図書館には宝物は数え切れないが、そのうちのひとつは社会学者鶴見和子氏の保有書籍文庫である。和子氏はその晩年を京都宇治市に過ごしたが、彼女の没後、本学関係諸先生方のご尽力と鶴見家の篤志を得て、彼女の保有していた研究書籍の多くを本学図書館内にて収納することに成功した。比較社会学に興味を抱く学生や研究者にとっては、まさに垂涎的であろう。また、鶴見家とのかかわりはそれだけにとどまらない。昭和初期の自由主義的政治家であった父君、鶴見祐輔氏が愛読したかなりの書籍をも保存しているのだ。祐輔氏が、自ら欧米の民主主義思想やさまざまな政治家の理念に触れて、いかに政治家としての自己形成をしていったのか、その足跡がこれら手垢のついた書物を紐解くことにより、ダイナミックに浮かんでくるに違いない。

「お宝」はまだある。大学図書館の受付向こうに佇まれる「勢至丸(せいしまる)」の等身大像がそれである。愛らしさのなかにも凛とした厳しさを湛えたそのお姿には思わず魅入ってしまう。勢至丸とは法然上人の幼名で、阿弥陀如来の脇士である智慧の権化、「勢至菩薩」に由来する。岡山の押領使であった父親と秦氏の系譜を汲む母親

は、ようやく生まれた待望の乳児に、乱れた世の中を解決するような智慧を持った人間に育てとの願いをこめて、勢至丸と命名したと伝えられている。勢至丸は期待たがわず成長し、14歳の頃には、法典の海と呼ばれた比叡山の各書蔵にて仏典の奥義を極めたいと、自ら願い出たという。まさに「後世畏るべし」とはこのことだが、今も昔も若者の持つ真摯な探究心とその情熱には心よりラブレターを送りたいと思う。

今日、社会、経済、政治などの多方面で問題が山積しているが、本学の学生もまた真摯な探究心と情熱を持って、我が図書館で自ら学び、自ら考えることで、問題解決力を身につけて世に出てほしい。それが、勢至丸像にこめた本学図書館の熱い思いであり、本学に在籍するありとあらゆる学生諸君に対する、いわば我が図書館からのラブレターである。

(しまもと せいいちろう)

❖❖❖ 大学図書館はどんな「場所」？ ❖❖❖

ライフデザイン学科・講師（教育工学） 桑原千幸

「図書館情報学」という学術分野を耳にしたことがあるだろうか。私は学生時代、このマイナーな学問を専攻していた。図書館情報学は、図書の収集、分類、保存やサービスといった司書職の専門知識に加えて、情報化の進展にともなうさまざまな情報メディアまでを対象とした学際的領域である。「図書館」に対して、古い資料が蓄積されている薄暗く堅苦しい建物の中で黙々と本を読む場所というネガティブなイメージを持つ人は多いようだ。特に大学図書館に関して言えば、電子ジャーナルやインターネットの発展によって図書館へ足を運ばなくとも学術情報へアクセスできるようになり、「蔵書をすべてデジタル化すれば図書館なんて必要ないのでは？」といった意見を耳にすることもある。はたして、今日の大学において「図書館」はもはや不要なのだろうか。

近年の知識・情報のデジタル化、ネットワーク化の進展にともない、図書館情報学の分野では図書館の機能や役割を問い直す動きが見られ、「場としての図書館 (the library as place)」という概念が盛んに論じられている。たとえば公立図書館では、従来の本の貸出を中心とした生涯学習機関としての役割のみならず、利用者同士のつながりを生み出すコミュニティの場としての機能が注目されている。大学図書館には、学術情報へのアクセス保障と教育・研究支援に加えて、「インフォメーション・コモンス」「ラーニング・コモンス」と呼ばれるネット世代の学習・生活行動様式に合わせた場としての機能・役割が期待されている。事実、文科省が毎年行っている調査「大学にお

ける教育内容等の改革状況について」によれば、ラーニング・コモンスを整備・活用している大学は、平成24年度の321大学（42%）から、平成25年度には389大学（51%）へと増加の傾向にある。「アクティブ・ラーニング」「反転授業」といったキーワードが脚光を浴びる中で、学習者の能動的な学びを支援する場所として図書館を整備し直す動きが加速しているのである。

実際にある大学のラーニング・コモンスを訪問した際の風景である。グループラーニングエリアでは、飲み物を片手に可動式のミニホワイトボードを囲んでにぎやかにディスカッションするグループや、ヘッドホンで音楽を聞きながらノートパソコンでネットサーフィンを楽しむ学生の姿が見られる。書架に近いサイレントエリアには、個別の座席で黙々と課題に取り組む学生がいる。学びのスタイルに応じて、アクティブに学習するエリアと集中して静かに学習に取り組むエリアが分けられているのである。本学の図書館はまだラーニング・コモンス化されていないが、短大図書館の閲覧室では蓋のついた飲み物を片手にグループで学習したり、学外実習に向けて紙芝居の練習をしたりと、さまざまな学習活動が可能である。

これからの大学図書館はどのような「場所」になっていくのだろうか。「図書館の中で利用者がどうあるべきか」ではなく、「学生の生活の中において図書館はどのような場所なのか」という観点で、新しい図書館像を考えていきたい。

(くわはら ちゆき)

🍎🍎🍎 私のすすめる3冊(私の推薦図書) 🍎🍎🍎

食物栄養学科・講師(臨床栄養学・応用健康科学) 望月 美也子

◎養生訓に学ぶ

立川昭二 著/PHP研究所

養生訓は、今から約300年前の江戸時代(1713年)に、儒学者で本草学者でもあった貝原益軒が養生書として出版したものである。この本は、原文に新仮名遣いで仮名を振り、著者が益軒の意図を解説しているのが特徴である。古文が苦手でもすらすらと読むことができるため、養生訓が、単に江戸時代の養生の技術や知識を論じたものではなく、益軒の経験に基づいた人間味あふれる教えや人生の楽しみ方が綴られているものだと気付いて欲しい。養生訓は、江戸時代の予防医学書とも言えるが、現代の私たちにとっては、心に響くメッセージが詰まっている。

◎エリオット・生化学・分子生物学

原著名: Biochemistry and Molecular Biology Third Edition

W. H. Elliott, D. C. Elliott 著/清水 孝雄、工藤 一郎 訳/東京化学同人

食物栄養学科の学生に「生化学は好きですか」と聞いたら、ほとんどの学生は「苦手」もしくは「嫌い」と答える。私も短大生の頃は、生化学に苦手意識を持っていた。しかし、この本(教科書)に出会い、「短大生の頃にこの本の存在を知っていれば苦勞しなかったのかも」と少し悔やんだ。原著は英語だが、和訳がとてもなめらかで、全体像が分かりやすく、要点もコンパクトにまとめられている。苦手な生化学を克服するのに、おすすめの一冊である。

◎普通の家族がいちばん怖い 徹底調査!破滅する日本の食卓

岩村 暢子著/新潮社

食物栄養学科の坂本裕子先生がこの本を読むきっかけを作ってくくださった。食と家族の調査を行っている著者が、現代日本の食卓について、さまざまな問題提起をしている。食に限らず、「普通」と思っていることが「普通ではない」という経験が、少なからずあるかと思う。この本を読み終えた後は、「物事を客観的に多面的に捉えて分析することの難しさ」と「普通とは何か」を考えさせられる。



(もちづき みやこ)



図書館のウラナ



本が「図書館資料」になるまで Part.1

図書館に並ぶ新着資料。図書館員がいったいどんな手順で登録しているのか？
ふだん目には見ることがない図書館の仕事の一部をご紹介します。

START!

選書

Selection



図書館の選書基準に基づいて教職員が選書するほか、リクエストも随時受付中です。年2回、学生選書ツアーもあります。



発注

Order



値引率や納品日数など最良の組み合わせで発注先を決めます。通常は百冊単位で出しますが、リクエストは1冊でも発注します。



Delivery!

「支払」 Registration

図書館固有の資料IDを付与し、書店へ実際に代金支払いできるように整えます。一度に数百冊処理することもあります。本が京都文教学園の財産になる第一歩。



Let's hurry up!

検品、受入

Check



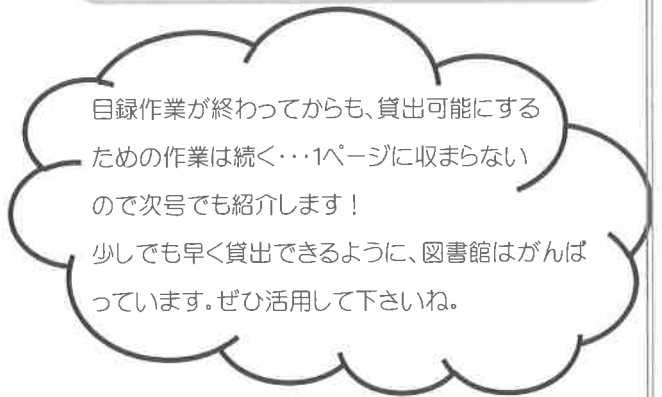
現物確認、伝票確認、予算区分など初期の点検を行い、登録用のデータを準備します。登録作業の交通整理です。リクエストは優先処理。

目録

Catalogue



現物を一冊ずつ手にとって、資料の形態や書名、著者、出版社、出版年など「書誌事項」を調べ、主題を確定して請求記号を決めます。ここまで済んだら本は学園の財産です。OPACで検索でき、「整理中」と表示されますが、貸出可能になるまであと少し！



目録作業が終わってからも、貸出可能にするための作業は続く・・・1ページに収まらないので次号でも紹介します！

少しでも早く貸出できるように、図書館はがんばっています。ぜひ活用して下さいね。



To be continued...!